

---

# 氷点下の翼

interu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

氷点下の翼

### 【Nコード】

N0065T

### 【作者名】

interu

### 【あらすじ】

一夏はISに触れて起動させてしまいIS学園に入学する。

しかしそこには幼馴染、そして恋人のシャルロットオリキャラと真希スケールライフがいた。

そして始まる一夏の幸せで大変な学校生活！

この作品の一夏は、改変させてあります。

改変ものが嫌いな方や、一夏は唐変木ではないと嫌な方は見ない方がよろしいと思います。それと、この作品は超簡潔型です。

結構・・・つらいな(前書き)

とりあえず最初に・・・ファーストの方、すみません。

結構・・・つらいな

俺は織斑一夏、なぜか女にしか動かすことのできない飛行パワードスーツ、インフィニットストラトスを動かしてしまった唯一の男だ。

そんな俺は現在IS学園にいる。保護だとかなんとか言われて強制に入学させられた。で、最初に思ったのは・・・

「これは想像以上にきつい・・・」

ISは女にしか動かせない。つまりこのIS学園は99.9パーセント女で占めている。男はただ1人、そう……この俺だけだ。

さらに、何か自分で言うのもなんなのだが、俺は何故か……もてる。もててしまう。いや、冗談抜きで……

中学生時代に告白されたことが軽く30回以上、アイドルと間違われて握手を要求されたことが約20回以上、スカウトマンにスカウトされたことは10回以上ある。

……まあ、俺は生憎そういうのは興味なかったから全部断ったけど……

つまり、そんな俺が女しかいないIS学園に入れさせられたわけ  
で、もう視線が半端ない。

みんな目がキラキラしている………と、うかがキラキラしている。それは……そう、餌に飢えた猛獣のごとく………。そんなことを考えていると……。

「では次、織斑一夏君」

自己紹介の番が回ってきたようだ。普通でいいよな？そう思い俺は立ち上がった。

っ！！なんだその視線！滅茶苦茶興味深々じゃねーか！

………まあ仕方ないか。早く自己紹介をやってしまおう

「初めまして、織斑一夏です。特技は家事全般とスポーツ全般、それと初めてのものでも一回見たらそれを自分のものにできることです。嫌いなのは暴力、それと理不尽な事です。男ですがあまり気にしないでくれるとうれしいです。これからよろしくお願いします」

そういったあとに俺は満面の笑みを浮かべた。すると………

「「「「「きゃー——————!——————」」」」」

といった、黄色い、本当に真つ黄色い声が教室中に響いた。なぜ毎年のようにこうなるのだろうか? …… ああ、多分最後の笑顔がいけなかったのか。

きゃーきゃーと騒ぐ女子、鼻血を出す女子、さらには失神する女

子まで現れた。そんなムードの中教室に入ってきたのは……

「うるさいぞ！入学初日くらい静かにできんのか!？」

なぜっ!？何故我が最強の姉、織斑千冬がここに!？……  
ああ、なるほど、ここで教師してたのか……どつりで家にあま  
り帰って来ないわけだ……。

そんな千冬姉は鼻血を出している女子や失神している女子を見るや  
否や俺のほうを向き……

「織斑、お前何をした？」

「いや、普通に笑顔であいさつしただけですけど……」

「そっか……なら仕方がないといえば仕方がないのだが……」

そうなのか！？まあこのあと千冬姉の自己紹介があったり、幼馴染の筈と話したりした。えっ？とばしすぎ、だって？まあ細かいこと

は気にしないでいいでしょ？

話は変わるが、正直、俺は簿の事が………苦手だ。暴力的で理不尽で、なんか色々と苦手だ。しかしそんな簿は俺に好意を抱いてるらしく………

うーん、どうしたものか………

結構・・・つらいな（後書き）

暇だったので書いてみました。

## 決闘

時は変わって授業の時間、最初にクラス代表を決めるらしく俺は推薦された。俺としては全く問題ないのだが……

「待つてください！クラス代表にはエリートであるこの私になるべきですわ！」

出た……イギリスの代表候補生にしてナルシスト？のセシリア・オルコットだ。

こういうタイプは箒以上に苦手だ……

「大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！私といたしましではこんな極東の地にいるだけでもたえがたい苦痛……」

「そこまですておけ」

「なっ！？」

「なにが男だと恥さらし、だ。あまり男をなめるな！女尊男卑などたかが風潮だ。本来なら男女平等であるべきなんだ。男には意地つてもんがある、世界中の男たちの中にはこの女尊男卑の風潮を認めてない者が何人のいるんだ。それになんだ、日本にいるのがそんなにいやだったらいギリスに帰れ！まあ日本とイギリスを比べたつてあるのは少しの経済力の差と文化の違いくらいだがな」

さすがに頭にきたぞあれは。俺自身、女尊男卑なんて認めたことなどないからな……………

「あなたっ！私の祖国を侮辱しますの！？」

「侮辱した覚えはない、それに侮辱されたのはこちらのほうだと思っが？」

「……………決闘ですわ」

「なぜそうなる？まあいいがな」

「織斑、オルコット、話はまとまったな？では一週間後に第三アリアナで行う、いいな？」

「はいっ」

というわけで決闘することになった。結構楽しみだ……

天才一夏と専用機……

「そういえば織斑、お前の専用機はもう少し時間がかかるそうだ」

クラスが少し騒がしくなった。まあこの時期に専用機だもんな……  
でも、俺には準備してもらおう必要はない……

「織斑先生、それは  
必要ないです」

「えいこい」

ことだ？」

「自分でつくったので……」

「「「「へっ!?!?」「」「」

クラスみんながものすごく驚いた表情をしている……

そりゃそうだろうな。

「お前……コアはどうした？」

「つくりました」

「まったく……お前の天才ぶりはもう次元を超えているぞ……  
……ならその専用機で戦うのだな？」

「はい、最初からそのつもりでしたけど……」

「わかった。しかし確認のため今日の放課後にそのISを私に見せ  
る」

「わかりました」

・そして授業が終わった後、俺は当然のごとく質問攻めにあつた……

こちらへは省略させていただきます・・・

時は変わって放課後、俺は千冬姉にISを見せるべく第三アリーナにいた

「では一夏、ISを展開しろ」

俺は言われるがままにISを展開した（待機状態は水色のブレスレ

ット)

「それがお前のIS……」

「そう、これが俺のつくったIS……氷花水月だ」

「氷花水月……」

その機体は美しい氷のように透き通った水色のフォルム……  
そしてその背中から大きな翼のようなものが生えている……。

その姿は一見すると天使のようである……

「スペックは？」

「普通の第3世代型より何倍か上」

「どんな技がある？」

「それは……また今度にしてくれない？もうちょっと改造した  
いから……」

「まあいい。今日はここまででいいから、寮に戻れ」

「あれ？俺って一週間は自宅からじゃなかったっけ？」

「いや、山田先生ががんばってくれたおかげでなんとか合わせられた。礼をいっておけよ？荷物は持ってきてやった」

「ありがとう。何号室？」

「1027室だ。3人部屋だからな、同居人は2人いる。2人ともよく知っているやつだ」

「1人は篤……とか言わないでくれよ？」

「安心しろ。お前があいつに苦手意識を持っていることぐらい知っているからな。もっとお前が好きな奴だ」

「もしかして……真希とシャルロット？」

「そうだ。今日あいつらは登校してなかったから気が付かなかったと思うがな……。お前と会つのがうれしすぎて熱を出してしまったそうだ。」

「なんだそりゃっ！？でも俺も滅茶苦茶うれしいんだけど……」

「早く行ってやれ、待ってるぞ？」

「おう！」

そう言っただけは1027号室へと急いだ……

## キャラ設定(前書き)

分かりずらいと思います。が勘弁してください。

## キャラ設定

織斑 一夏

原作のように唐変木ではなく、IS戦闘においても楯無以上の実力をもつ。

一度見たものは必ず忘れることもなく、初めてやることでもすぐに覚え、短時間でそれを極限まで極めることができる。料理の腕前はもう世界のなかでもトップに君臨する。

文武両道、才色兼備、さらにとても優しく、性格もよく、原作以上にイケメンで、体型もモデル以上なので目があった女性は大体おちる。

まさに、楯無以上の完璧超人。

専用機・・・氷花水月

好きな人・・・シャルロット、真希

苦手な人・・・篤、セシリア

親友・・・五反田 弾

好きなこと・・・料理

嫌いなこと・・・理不尽な暴力

シャルロット・デュノア

専用機・・・ラファール・リヴァイヴ カスタム？

好きな人・・・一夏

苦手な人・・・特にいない

親友・・・真希

好きなこと・・・一夏といちゃいちゃすること

嫌いなこと・・・特にない

星野 真希

好きな人・・・一夏

苦手な人・・・セシリア

親友・・・シャルロット

好きなこと・・・一夏といちゃいちゃすること

嫌いなこと・・・特にない

この2人がメインヒロインです。ちなみに2人とも幼馴染、兼恋人です。シャルロットも真希も小1の頃から一夏の家に住んでいました。2人とも親をなくしている、だから千冬がこの2人を引き取り中2になるまで2人を養って、それ以降、シャルロットは本国に帰り、真希もそれについていく形で別れを遂げたが、一夏もIS学園に入学したため、再会をはたした。3人とも仲が非常によく、喧嘩などはしない。将来は3人で結婚するのが3人に夢。

こんな設定です。真希はまだ専用機はありませんがまた出します・・・多分！

細かいことはあまり気にしないでくださいね！？

## 再会

現在地、1年寮1027号室前。ああ、真希とシャルに会うのは本当に久しぶりだ。正直こんなところではあるけど、再会できるのはすっげーうれしい。

そんな思いを

胸に俺はドアを開けた……

「久しぶり、一夏!!」

「のあっ!?!」

俺が部屋に入ると2人がおもいきり抱きついてきた。

「いきなり抱きつくな!!」

「いいじゃん、恋人同士なんだし!!」

「はあー。ま、変わってなかったようで安心した」

「夏は昔よりかっこよくなったよ！」

「シャルの言うとおり！」

「そうか？」

「うんっ！」

「ははは、ありがとな」

俺と俺の恋人たちはこ

んな再会を遂げた。

抱きついてきたのは少しびっくりしたが、まあ、当たり前といえ  
ば当たり前なのだが……

ていつかまだ抱き着いている！？こんなところ誰かに見られたら……

・・・

「「「「おじやましませーす!」「「「「

「っ!」

やばい!どこからか俺の居場所をかぎつけた同級生がたくさん入ってきた。

そして抱き合っている俺たちを見て・・・

「「「「え、え?ええええええええ!!!」「」

「織斑君、その美少女の2人は誰!？」

「なんで抱き合っているの!？」

「どういう関係!？」

あー、うー。なんか口が迷走する・・・そんな感じの俺を見て、恋人2人は・・・・・・・・

「私たちと一夏は幼馴染、兼恋人だよ」

「婚約しているようなもんだしね、抱き合っているのは当然だよ」

また沈黙。そして数秒あけて・・・

「織斑君って恋人いたの!？」

「しかも2人!？」

「そのうえすっごく美少女！」

「いいなー、羨ましいなー」

はあ、やっぱり言っちゃった……。2人は見事な連携で同級生に説明している……。

それで、説明が終わったあとに同級生たちは、この噂をまき散らすべく、いろんなところにダッシュしていった……。

明日はまた大変そうだ……。いろいろな意味で……。

## ラブラブな3人と怒れる幼馴染

「そういえば一夏、一週間後にイギリスの代表候補生と試合するんだよね？」

シャルロットはふと、このことを思い出した。

「まあな。でも、俺の練習みたいなもんだろ？イギリスの代表候補生って言うっても、所詮候補生なんだし……。」

「練習って……。まあ一夏の事だから確かにそんな風になりそうね。」

「流石真希だな、ちゃんと理解している。」

「僕もちゃんとわかっているからね？」

「シャルが分かってくれてることぐらいも知っているぞ」

「うんっ」

俺はちらつと時計に目を向ける……

「11時か、そろそろ寝るか」

「うん、私も眠たくなってきちゃった」

「僕も眠たいな……。」

「よし、じゃあ寝よう」

なぜかシャルと真希が俺を見ている……。ああ、あれね……

「一緒に寝たいのか？」

「うんっ！」

「素直でよろしい、よし、一緒に寝よう」

俺がそう言うと2人は、ぱっぱと俺のベッドに入ってきた。

そうして俺たちは3つベッドがあるにも関わらず、1つのベッドに一緒に寝た。

こっすするのは久しぶりだ。俺は少し昔の事を思い出していた……

翌日の朝、学校中が騒いでいた。もちろん、一夏のことです……  
そしてそのことを聞いた篤は悲しみと怒りの感情にあふれていた……

（一夏に彼女！？しかも2人いて、その2人とも幼馴染……なぜだ！？幼馴染といえば私がいるのになぜ……ええいつ、次に顔を見たときには成敗してくれる！）

篤はこの時、なにがなんでもその仲を裂こうとしていた。  
とにかく、恋人の存在を認めたくはなかった……

そんな篤の思いなど関係なく、他の生徒達は一夏が現れるのを楽しみに待っていた。

そしてついに現れた、一夏+恋人2人が！

しかもポジションは一夏が真ん中、そして右側にシャルロット、左側に真希がいて、2人ともがつちりと一夏の腕を組んでいる。そして腕をくまれている一夏もどことなくうれしそうである。

「あっ！本人登場！」

3人がやってきたのにきずいた1人の生徒が声をあげると……

「ほんとだ！しかも2人の彼女を引き連れて！」

「すっごくいい画になる！写真撮らせて！」

そういつて生徒たちは3人の方へと近づいてくる。

しかし真っ先に近づいてきたのは……………

「一夏あああああ————っ！……！」

箒である。箒は木刀を手に取り、一夏に向けて思いっきり殴るつもりしてきた。

一夏の運命やいかに！？

## ラブラブな3人と怒れる幼馴染（後書き）

一夏の運命やいかに！？・・・なんて書いてますが一夏は大丈夫  
でしょうね・・・  
なにせ完璧超人なのだから・・・

諦めない幼馴染……. だけど

はあ……. やっぱりな…….

箒が俺に好意を抱いていることは知ってたからこうなるだろうとは予測してたけど…….

「「「「きゃーーーーー!!」「「「「

俺たちに近づこうとしていた他の生徒達は悲鳴をあげた。

確かにこの一撃をくらったら俺は怪我どころでは済まないだろう。しかし、俺は落ち着いている。それは真希もシャルロットも同じだ。

「はあ…….。ていつ!」

「「「「つ!」「「「「

箒を含め、真希とシャルロット以外の女子はとても驚いている。驚くのも無理はない。だって今、俺は……. . . . . 拳ひとつで木刀をへし折ったのだから……. . . . . そして俺はまわりを気にせず話し出した……. . . . .

「箒、何事にも暴力で解決しようとするのはいい加減やめろ」

「なっ! ? わ、私は……. . . . .」

「それに……. . . . . お前が俺に好意をいだいていることくらい知っている」

「つ! ! !」

「だけど俺はお前の気持ちには応えられない。俺には今、誰よりも大切な人がいるからな。だからさ、その……諦めてくれ。本当にごめん！」

「……めない」

「えっ!?!」

「私は認めないぞ！なぜ私も幼馴染なのに私を選ばん!?!とにかく私は認めない！」

はあ……まだ諦めてくれないか。んっ?いいこと思いついたかも……

「じゃあさ、こうしよう。剣道で試合して俺が負けたらなんでも言うこと聞いてやる、だけど俺が勝った時は諦めてくれ。どうだ?」

「……わかった、乗ろう」

よしっ、乗ってくれたぞ。

「武士に二言はないな?」

「もちろんだ!」

こうして俺は筭と試合することになった。さすがに諦めてくれるよな?

1人の女子生徒が真希たちにこんなことを聞いていた……

「2人はいいの？織斑君、あんなこと言っちゃたけど……」

「大丈夫。だって……」

「一夏が負けるはずないから!!」

うれしいこと言ってくれるな……まあ、その通りだけど。

現在地、剣道場。俺は箒と試合をするためここにいる。  
観戦している人もたくさんいる……

「真希、シャル……すぐに終わらせる。終わったらいちやいち  
やしよな」

「うんっ!!」

おっと箒が出てきた。よし、2秒で終わらせるぞ!!

「お前……防具は？」

「防具？いらないうて、俺には」

「ふんっ、なら別にいい」

「じゃあ始めるぞ！5、4、3、2、1、いくぞ！」

パシンッ！！

箒は一瞬で後ろに吹っ飛んだ。理由は簡単、俺は一瞬で箒に近づき  
胴をつつた。

真希とシャルロット以外の人は何が起きたかわからないご様子。

「これで俺の勝ちだ。だから……今度こそ諦めてくれ。武士に二  
言はないんだろ？」

そういつて俺は真希、シャルと一緒に寮へと帰って行った。

真希とシャルはずっとニコニコしているが他の人たちは少しの間動

けなかつたそうだ・・・

さすがに今回は箒にひどい事したな・・・今度謝っておこう。

諦めない幼馴染・・・だけど(後書き)

自分で書いてて思いました・・・箒の扱いがすっごくひどい！  
ファーストの方、改めてすみません・・・  
多分この扱いは直らないと思います。

出陣（前書き）

更新少し遅れました

## 出陣

箒はなにがどうなったかいまだ分からずにいた。

「なにが起こったんだ？なぜ私は試合が始まっていきなり倒れてしまったのだ？」

いやっ、そんなことより私は負けてしまった……

もう諦めるしかないか……しかし、このまま諦めたら私はどうなる！？

よしっ、決めたぞ。表向きでは諦めたといっておいて、これからもっとアピールすればいい！

そうすれば一夏も私に惚れるだろう。あいつは2人も彼女がいるのだ。

1人増えたところであまり変わらないだろう。それに私も幼馴染だしな、うんっ！」

箒は心の中でこう言っていた……。箒の執念恐るべし！！

時は変わってセシリアとの試合の日。

俺側のピットには千冬姉、山田先生、そして真希とシャルがいる。

簿も頼みに来たそうだが、さすがにあんなことがあったので許可しなかった。  
そろそろ本番なので氷花水月を展開する。ちなみに山田先生には初披露だ。

「それが織斑君がつくったISですか……。す、すごいですね」

「ありがとうございます。こう見えても束さ……。篠ノ之博士よりここはいいですから」

そういつて俺は自分の頭を指した。

「なんかもうつついていけません……」

「織斑、無駄話はいい。さっさと終わらせて来い。」

「了解。じゃあ真希、シャル、行ってくるからな」

「うんっ！行ってらっしゃい！」

相変わらずのとびきりスマイルで、俺は元気が出てきた。  
そして俺はアリーナ内へと飛び立っていった。

一夏が行ってしまった後、山田先生が千冬にこんなことを呟いていた……

「織斑君って何者なんですか？成績もものすごくいいですし、なにより、一からISをつくれるなんて、しかもすっごく、か、かついいですし、見た限り性格もいいですし……」

「麻耶、すこし言い過ぎではないか？大半のことは事実だが……まあ何者かと言われたら、一言でいうと……神童、いや化物か……」

「化物？」

「あいつは初めてやることでも必ずその頂点に立つ。

料理だってあいつは初めて一ヶ月で世界の頂点に立った。それに剣術で私をあいつに勝てない。

一度世界の頂点に立った私をあいつは一年で倒した。今あいつに勝てる者はいないだろうな」

「なんかもうすごすぎてついていけません……」

「ついていけなくて普通だ。この話についていけるのは真希とシャルロットだけだろうな。」

「あの2人っていつも織斑君と一緒にいますけどどういう関係なんですか？」

「見ての通り恋人同士だ。2人ともな」

「なんか織斑君ってずるいです……」

「ああずるいな」

「特にあの笑顔が……」

山田先生は顔を赤めらせてそういった……

## 最強のIS・・・勝てないはずがない

さーてと、早く終わらせて帰るとするか。

もう少して試合開始だ。俺と氷花水月の初陣でもあつて結構楽しみにしていた。

そんな上機嫌な俺に対戦相手のセシリアが話しかけてきた。

「最後のチャンスをあげますわ」

「チャンス、とな？」

「いくら自分でISをつくつたといえど実力は何千時間とISを動かしてきた私とまだ動かして数時間のあなたでは比べものになりませんわ。このまま戦えば私が勝つのは自明の理。今泣いて謝るのでしたら許してさしあげないこともありませんわ」

「生憎、そういうのはチャンスとは言わないし、受け入れもしない」

「そう、では・・・お別れですわね！」

そういつてセシリアはライフルを一夏に向けて撃った。

しかし一夏はまったく動じることはなかった。一夏にとってこんなものは脅威でもなんでもなかったからだ。

「アイス・ミラージュ」

一夏がそういつと一夏の前に大きな氷の鏡があらわれた。

そしてセシリアがはなったエネルギー弾はこの鏡に当たり、エネルギー弾はセシリアの方へと一直線。

そのスピードはライフルからはなたれた時よりも数倍速かった。はじかれたエネルギー弾はセシリアに直撃した。

「な、なんですの!?!それは!?!」

「見ての通り、これはありとあらゆる攻撃をはじくことができるんだ」

「な、なんですって!?!もう面倒くさいですわ!踊りなさい、私とブルーティアーズが奏でる円舞曲で!」

「踊るのは得意だが踊らされるのは得意じゃない。それに待っている人がいるのでな、早々に終わらせてもらおう」

一夏は手を上にかざした。

「アイス・レイン」

そういつとセシリアの頭上にたくさんの氷の粒のようなものが降ってきた。

「なっ!」

セシリアが驚いた時にはもう遅かった。そして全てがセシリアに直撃した。

「な、なんですのあのISは!?!エネルギーは……あと半分以下!?!」

セシリアがひるんでいても一夏は手を休めない。

「黒天白夜」

そついうと一夏の手には2つの3メートルほどの長剣が握られていた。

そして一夏は瞬時加速をつかってセシリアに近づいた。

「雪月花、発動！」

黒天白夜はさらに長くなり2倍ほどの長さになった。

雪月花

これはかつて千冬が使用していた暮桜のワンオフ・アビリティー、零落白夜と同じ能力をもっている。

シールドを貫通し、絶対防御を発動させ、大幅にシールドエネルギーを減らす。

しかし自分のシールドエネルギーは使わない。

「これで終わりだ！」

セシリアは抵抗するすべもなくただやられるだけだった。

「勝者………織斑一夏！」

試合時間わずか30秒、圧倒的な差で一夏の勝利に終わった。

こうして一夏は代表候補生を30秒で倒すという偉業を成し遂げた。

**最強のIS・・・勝てないはずがない(後書き)**

- ―夏強すぎじゃねっ?と思われると思いますが、ご了承ください。
- ―夏は千冬より強いという設定です。

## シャルの笑顔に勝てる者はいない

俺はピットに戻ってきた。するといきなり、というか案の定……

「おかえり！一夏！」

「のあ！」

2人が抱きついてきた。それを千冬姉はやれやれと呆れた感じで、山田先生はポカーンとしている。

そんなの気にせず、抱きついてる2人をみたらこっちもその気になつてきて、俺は2人を抱き返す。

しばらく抱き合っていると、しびれをきらした千冬姉が……

「山田先生もいるんだ、そこまでにしておけ。それより織斑、どんな感じだった？」

俺は一回2人を抱くのをやめ、質問に答える。

「どんな感じって聞かれると、楽勝だったし、一番心配していた雪月花もちゃんと使えたし、アイス・ミラージュもいい感じに使えた。ただアイス・レインは少し範囲が狭かったな。まあ、最初にはちゃんと動けたし、これからもうちょっと馴染みたいかな。こんな感じです」

「まあいい。私を倒した限りこれから負けることは許さんからな」

「わかってるって」



麻耶はまたポカーンとしていた。  
今日の麻耶はずっとポカーンとしていた気がする……

場所は変わって下校中の一夏達……

「一夏って本当になにが出来ないんだろっね？」

真希がいきなりこんなことを聞いてきた。

確かに俺はなにが出来ないのかわからない。だからこれといった努力をしたのはせいぜい料理くらいだ。

他の事は1日くらいでできるようになる。それはそれで個人的には少し嫌な感じはする。

まずがんばってもできない人がいるのに、自分にこんなに簡単にできちゃっていいのか、

そして俺はもつと努力してみたい。努力してだれかを守ってみたい。ただし現実残酷だ。

このISだつて一週間で世界最強を倒してしまった。

ISくらいなら努力しないとできないと思っていたのに、こうも簡単にできてしまうと自分が怖くなる。

そんなことを考えていると……

「ほーら、そんな深刻な顔しないでっ。幸せが逃げちゃっよ？」

「そ、そんな深刻な顔してたか？」

「うん。だから笑って、ほら」

シャルは満面の笑みを浮かべた。そんなシャルの笑顔に俺はとてもどきどきしてしまった。

「わかった、ありがとうシャル」

俺も一番の笑顔で返す。

「やっとで笑ってくれた 私たち、一夏の笑顔がなによりも好きだから！」

「真希……ありがとう」

俺たちは寮へと戻っていった。

シャルの笑顔に勝てる者はいない(後書き)

これから部活がすこしばかり忙しくなるので更新が遅れるかもしれません。

## 騒がしい一日

決戦翌日

「では、1年1組のクラス代表は織斑一夏くんです！」

朝のSHRで元気よくいう山田先生。そこで、クラス中が騒ぐ。

「いやー、本当にこのクラスでよかった！」

「せっかくの男子、そしてイケメンでISでも強くて、天才で、彼女もちで……」

「もうこれ以上の幸せはないわ！お母さん、お父さん、ありがとう！」

おいそこつ、世界は広いからこんなんで一番の幸せを得るでない。もっと幸せなことはあるはずだぞ！？……いや、知らないが。

そんなこんなで俺はクラス代表になった。

他のクラスから強すぎるから反則だ！と言われたが、俺が笑顔で頼んだら鼻血を出しながら了承してくれた。なんかすんません。

「クラス代表は織斑一夏！依存はないな？」

「……はいつ！」「……」

時はかわって昼食の時間。

恋人たちと飯を食べていたらセシリアが現れた。

「あの……この前はすいませんでした！」

いきなり謝罪の言葉を言われて少しびっくりしたが、このまえのことなどまったく怒ってなどいないので……

「いいよ、別に。気にしてないし」

俺はさらっと返した。そうするとセシリアは安心した様子で……

「それでは……」

と笑顔で去って行った。そんで俺は食べるのを再開し、あーんを恋人にやっている……

「相変わらずラブラブだね！」

1人の生徒が話しかけてきた。それに恋人たちが反応して……

「ありがとっ！私たちはいつもこうしてもらってたのよ」

「いいでしょ？」

なにさらっつと暴露してんだか……。なんか恥ずかしくなってきたぞ。

そんな俺に関係なく2人はふふんつと胸を張っている。

そんな胸を見てしまうと、なんとというか眼に毒のような気がする……  
そんな俺にきずいたのか……

「あっ、一夏。もしかして胸のほう見てる？」

「ば、ばか！そそ、そんなことは……」

「一夏のエッチ」

がはっ。2つの矢が俺の胸に突き刺さった気がする……この言葉は攻撃力が凄まじい様で、俺は少しボーっとしてた。それを微笑ましく見てた生徒がやっつとで本題を言い出した。

「ところで3人とも、放課後って空いてる？」

「空いてるけど……何かあるの？」

「実は……」

放課後

たくさんの生徒達が俺を取り囲んでいる。

それはクラスや学年関係なく、本当に大勢の女子たちが……  
一見するとそこはどう考えても一夏のハーレムにしか見えない光景である。

もちろん隣にはシャルと真希。

なんか俺のクラス代表決定を祝ってくれるらしいのだが、それは純粹にうれしいのだが、

少し人数が多すぎるのではないかと思う。なんか俺みて鼻血出してる人もいるが大丈夫か？

そんなこんなでパーティ（？）が始まった。

「……織斑一夏君、クラス代表決定おめでとー！！！！」

パンツ、パンつとクラッカーが鳴り響く。

「じゃあ織斑君、早速食べよう！」

「なにがいい？」



なんかすっごい大きな声をだして騒ぎだした。はつきり言っても  
凄くうるさい。

鼓膜が破れそうなくらい・・・・・・・・いや、本当に。  
それで俺のつくった料理を食べた人は・・・・・・・・

「おいしい！おいしすぎる！これ本当に現実だよね！？」

「もう死んでもいい・・・・・・・・」

おいこら、まだ死ぬな！？そんでたくさんの人が感動してかなん  
か倒れてしまっただけど、  
パーティーはとても楽しく行われた。

そうして俺の騒がしくも楽しい時間は過ぎていった・・・・・・・・

## 騒がしい一日(後書き)

あれ？筭の出番がない・・・  
と、最後にきずきました。筭、すまん！そして・・・どんまい！

小柄な幼馴染登場（前書き）

鈴の登場です

## 小柄な幼馴染登場

騒がしい日の翌日

俺はいつも通り登校し、いつも通りクラスメートと話していた。

「ねえ、織斑君、2組のクラス代表変わったって知ってる？」

「んっ、知らなかったな。どんな奴だ？」

「噂によると、中国の代表候補生らしいよ」

「中国、中国が……。。中国っていうとあいつのことを思い出すな」

「うんっ。しばらく会ってないけど元気にしてるかな？」

「まあ、あいつのことだから元気にしてないなんてことはないか……」

「確かに。はあ、なんかいきなり会いたくなってきたなー」

「僕も。でも、もしかして代表候補生になっているとか……」

「そんなことは……」

「あるわよっ！ー！ー」

俺とシャルと真希が話しているときいきなり、怒鳴り声と共にドアが開いた。

その声に聞き覚えがあつた俺たちは声のする方向へと振り向く。そしてそこには見覚えのあるツインテールで小柄な、懐かしいやつがいた。

「お前……もしかして鈴か？」

「そうよ、中国の代表候補生、凰 鈴音。真希、シャルロット、そして一夏、久しぶりね！」

「鈴、久しぶり！もうっ、私さみしかつたんだからね」

そういつて真希は鈴に抱きつく。

「鈴、変わってないね」

「あんたたちもね。特に真希、あんたいい加減はなしなさいよ。恥ずかしいじゃない」

「ふふふ、ごめんごめん」

そういつて幼馴染たちがじゃれあっている。そんな幼馴染たちに他のクラスメートは興味津々。

セシリアは微笑んでいて、篝は……なんか黒いオーラをはなっている。

なぜそんなオーラをはなっているのか検討はついていないが、止める術などないだろうな。

そんなこんなでもう時間だ。鈴を早く2組の教室に帰さなければ……

「鈴、そろそろ帰ったほうが身のためだぞ」

「はぁ？それってどういう意味よ？」

「つまり……、ごめん、タイムアップだ」

「だからどういう……」

「パァン！」

鈴はいきなり後ろから頭部に出席簿アタックをくらった。

やった人物は……ていうかこんなことやる人は1人しかない。

鈴も正体に気付いたのか、おそろおそろ後ろを向く。割れそうな頭を抱えながら……

「もうSHRの時間だぞ」

「ち、千冬さん……」

「学校では織斑先生だ。さっさと戻れ邪魔だ」

「す、すみません……」

さっきの威勢はどこへやら。鈴がさらに小さく見える。

「あんたたち！また来るからね！逃げないでよ！」

鈴、復活

「別に逃げはしないけど……」

「早く行け！」

「はいいいいい！」

鈴はすぐさま2組の教室へと戻っていった。  
そんなこんなで俺たちは幼馴染との再会を果たした。

## 幼馴染とのおしゃべりと宣戦布告

食堂にて

「待つてたわよ、あんたたち！」

俺とシャルと真希が夕飯を食べに行くと、鈴が小つちやい体で堂々と俺たちを待つていた。

おいおい、そんな大声出して恥ずかしくないのかい！？

他の生徒達もこちらへと視線を向けている………なんか俺が恥ずかしくなってきたぞ！

なんにもしてないのに………

「とりあえずそこどうぜ。邪魔になるぞ」

「わ、わかってるわよ！」

そして俺たちは、1つの丸いテーブルに座った。

なんか隣のテーブルでまたもや黒いオーラを出している人がいるけど………

まあ、ほっておこう………なんかすまん。

で、俺たちは話し始める。

「改めて……鈴、久しぶりだな」

「こちらこそ、久しぶりね」

「ていうか、いつ帰ってきたんだ？連絡くれりゃあ迎えに行ったのに」

「気持ちは嬉しいけど、それじゃあ、あなたたち驚かないでしょ？」

「鈴らしいね。昔から僕たちを驚かせようとしてたからね」

「でもそのたびに、一夏にはれてたよね」

「うるさい！でも今回は驚いたでしょ？」

「当たり前だ。いつ代表候補生になったんだよ？」

「あんたこそ、ニュースで見たときびっくりしたじゃない。  
なんでISを動かしちゃったのよ？」

「なんでって言われてもな。少しISに興味を持ってさ。東さん  
に頼んで、触れてみたら動いた。」

「……………そんな理由？」

「うん」

「……………」

「……………」

嫌な沈黙だ。

「ま、それはどうでもいいとして……………」

どうでもいいのかよ!?!……………どうでもいいか。

「あんだ、クラス代表なんだって？」

「ん？そうだけど……鈴木もクラス代表だろ？」

「そうよ！だから今度のクラス対抗戦で戦うことになるから覚悟しなさいよ！」

「おう！でも……本気出した方がいいか？」

「こっちのセリフよ！大体あんだみたいなド素人に負けるわけが……  
ないわけじゃないわね……」

「その通りですわ！」

セシリア乱入

「えっと……あんたは？」

「私はセシリア・オルコット、イギリスの代表候補生ですわ。  
セシリアとお呼びください」

「で、セシリア。さっきのはどういう意味？」

「えっと……恥ずかしいお話ですが、私は一夏さんと模擬戦を  
しまして……」

「30秒で負けてしまいました……」

「30秒！？代表候補生として呆れるわね……」

「な、なにを！あなたもやってみればわかりますわ！」

「少なくとも30秒では負けないわよ！」

セシリアと鈴が言い争っている。

少なくとも、セシリアは悪くない。鈴はもう少しこういつとこころを直した方がいいと思うぞ。そんなの関係なしにまだギヤーギヤーギヤーギヤーと……

こいつらこれから大丈夫か？と心の片隅で思った。

「一夏、長くなりそうだからかえろ」

真希がそういつて俺の腕を組む。

「僕も同じ意見かな……」

シャルも真希と同様、俺の腕を組んだ。

「じゃあ帰るか」

俺たちはこそこそと1027号室へと帰って行った。

翌日、鈴とセシリアから怒られたのはいうまでもない。

**幼馴染とのおしゃべりと宣戦布告（後書き）**

あれ？また筭の出番が……

## クラス対抗戦（前書き）

かなり飛びました。すみません。

## クラス対抗戦

さて、今日はクラス対抗戦。運よく？初戦は鈴が相手だ。

鈴の実力はセシリアよりも上らしい。さすがにあのときみたいには倒せないかも。

だがしかし、千冬姉とやったときに比べれば楽なものだろう。

あときは本当に大変だった。

俺的にはすごいぎりぎりだったと思う。

「織斑、30秒後に試合開始だ」

なんやかんやだもう時間らしい。とりあえずシャルと真希に……

「シャル、真希、行ってくるよ」

「うん、行ってらっしゃい！」

2人に見送られた俺はアリーナへと飛び立った。

アリーナには、専用機の甲龍シエンロンを身にとった鈴が待っていた。

甲龍はセシリアのブルーティーズ同様、  
アンロック・ユニット  
非固定浮遊部位が特徴的だった。

さらに、肩にの横に浮いた棘付き装甲が、  
スパイク・アーマー

やたら攻撃的な自己主張をしている……

あれで殴られたらすげー痛そうだな……

くだらない事を考えていたら、鈴が話しかけてきた。

「今からあんたをボコボコにするけど手加減してあげようか？」

「んなもんいらねっ。全力で来い！」

・・・・・・3 / 2 / 1、試合開始！

「じゃあお望み通り！」

試合開始直後に鈴が青竜刀で切り込んでくる。しかし俺はなんなくかわす。

「よくかわすじゃない、さすが天才と呼ばれていた化物ね」

「鈴、化物は少し酷いぞ・・・・・・」

「あらショックだった？じゃあこれくらって忘れなさい！」

嫌な予感がした俺はすぐさま鈴から遠ざかった。すると鈴が何かを撃った。

眼では見えないが確実に何かを撃っている。

俺は感覚だけでそれをよける。

あれは多分、『衝撃砲』だ。空間自体に圧力をかけて、砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す第三世代型の兵器だ。

「本当によくかわすわね。この衝撃砲、《龍咆》は砲身も砲弾も見えないのが

特徴なのに・・・・・・」

正直、俺にとって目視できないというのはさほど問題ではない。

俺は自分の感覚だけでそういうのはわかってしまうからな。

鈴は少し悔しそうだ。

さてと、今度はこっちから攻めるとするか……

「鈴、そろそろ本気で行くぞ！」

「あんたまだ本気じゃなかったの!？」

「おしゃべり終了」

そういつて俺は『アイス・レイン』を鈴の頭上から放った。  
鈴もセシリア同様にもろでくらった。

「あんた、それなんなのよ!？」

「自分で考えな！」

「うるさい……」

鈴も負けじと衝撃砲を撃ってくる。しかし逆効果だ。

俺は『アイス・ミラーージュ』ですべて跳ね返す。

気付けば、甲龍のシールドエネルギーは半分になっていた。

そして『雪月花』を発動する。イグニッション・ブースト 瞬時加速で

鈴に一気に近づきそして……

「これで終わりだ！」

勝った!と思った。このときは……

しかし俺はこの試合に勝つことはなかった。なぜなら……、

ズドオオオオンッ！！！！

鈴に刃が届きそうになった瞬間、突然アリーナに大きな衝撃が走った。

## クラス対抗戦（後書き）

今回はすごく飛びました。すみません。

正直いうと、早く文化祭あたりを書きたいし、

更識 楯無さんを出したいのです、はい。

ちなみに作者の好きなヒロインは……

1位……シャルロット

2位……楯無さん、チエルシーさん、のほほんさん

3位……ナターシャさん

てな感じです。シャルロット以外の主要ヒロインより、

サブキャラの方が好きです。あ、一夏も結構好きなんですよ。

**襲撃者と一夏の本気と『あの人』（前書き）**

今回は自分で書いてても意味が分からなくなってしまいました・・・  
・・・

## 襲撃者と一夏の本気と『あの人』

ステージ中央から煙が上がっている。

どうやらさっきのがアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきたっぽい。

多分、ISだな、というかISでなければ、こんなことはできない。鈴もこのことには気づいているっぽい。

『一夏、試合は中止よ！あんたはピットに戻って！』

プライベートチャンネルにより、鈴の声がこっちに届いた。しかし、この指示は受け入れられない。

「あほ言え、おまえはどうすんだ？

自分が食い止める、なんていうなよ？俺はエネルギーがまだまだ残ってる。

だが、お前はもう半分だろ？そんなんじゃない、あれの相手はできないぞ。

あれの相手は俺がやる。だからさがってる、な？」

『でも……』

「いいからさがってる。俺は大丈夫だから」

鈴を安心させるかのような笑顔で俺は言った。

「わ、わかったわ。死ぬんじゃないわよ！」

「あたりめーだ。こんなとこで死んでたまるかよ」

鈴はおとなしくさがっていった。

しかし、ピットには戻れない。なぜなら……

『織斑君！鳳さん！アリーナから離脱してください！

すぐに先生達がISで制圧に……』

「先生、それは無理です」

『えっ？』

「遮断シールドがレベル4に設定してあります。

しかも、扉がすべてロックしてあります。

あのISは俺が『本気』でやりますから大丈夫です。すぐ終わります。

では……」

ピット内にて

「織斑君！？織斑く……」

「大丈夫ですよ、山田先生」

「へっ？」

姉&恋人の声が見事にそろった。

3人の顔はまったくこの事態にも動じてなく、いつも通りだった。ピット内で動揺しているのは山田先生だけだった。

「みなさんそろってなにを……」

「一夏は大丈夫ですよ。」

一夏が本気になったら勝てる人はおるか、

右に出る者もないとまで言われていましたから。

これはISを含めて、知能、スポーツ、料理など全てにおいて共通しています。

まあ見ればわかりますよ。織斑一夏という人間が」

若干楽しげに言う真希に頭上で『?』を浮かべている山田先生は、とりあえず一夏に集中することにした。

再びアリーナ

煙が晴れ、そこに現れたのは予想通りISだった。

しかし、そのISは普通ではなかった。

いろいろと変なところがあるが、なにより奇妙だったのは……  
そのISは全面<sup>フルスキン</sup>装甲だったことだ。

しかも、人の気配がしないことから、これは無人機。

無人のISなんて聞いたことないが、『あの人』ならつくりうる。  
ていうか『あの人』じゃないとこんなことはできない。

(俺はできるけど……)

そんなことを考えていると、無人ISはこちらに向けてビームを撃つてきた。

俺はよけて、精神を集中させる。

集中することによって俺は本気になる。

「ふう……行くか！」

一夏は『雪月花』を発動させる。そこにまたビームを撃つてきた。

一夏は黒天白夜を目視など到底できないほどのスピードでふるった。すると、無人ISからのビームは……切り裂かれた。

ビームはとても高威力のものだった。

しかし、一夏は一振りですそれを切り裂いた。

本来ならそのようなことはありえない、というよりあってはならない。

一夏はそれを平然とやった。

そして一夏は連射されるすべてのビームを切り裂き、  
イグニッション・ブースト瞬時加速を使ってISの方へと向かう。

しかし、これも普通の瞬時加速ではない。  
イグニッション・ブースト

とにかくスピードが桁違いだ。

そしてISへと近づき黒天白夜をふるう。

これもまた一瞬で両腕、両足を切り捨てた。

すると、そのISは止まった。

「まだまだ甘いですよ……束さん」

一夏はアリーナで1人、呟いた・・・

**襲撃者と一夏の本気と『あの人』（後書き）**

更新遅れました。

なんか、アイデアが浮かびません。

・ シャルロットを先に出してしまったから、このあとの展開が……

まあ、がんばってみます。

## 生徒会長登場

謎のISの襲撃の翌日

あのISはやはり無人機で、コアはどの国にも登録されていない物だったんだそうだ。つまり、469個目のコアというわけだ。

意図はわからないが、やったのは東さんで間違いないだろう。

コアをつくれるのは世界中で俺と東さんだけだからな。

このことには、真希もシャルも、そして千冬姉も勘づいてるようだった。

たく、あの人は本当になにがしたいんだろうか？

頭の良さでは勝っているが、あの人の考えていることはわからない。わかっていたらこんな事態避けられたのにな……。

まあ、あの人のことを完璧に分かるうとする方が無駄な話か……

しかし、昨日あんなことがあったのに、俺の生活はいつも通りだった。

いつも通り登校して、いつも通り授業を受けて、いつも通り昼食を食べて、

そして今、いつも通り夕食を食べようとしている。

ここまではいたって普通だ。俺の通常で、楽しくて、幸せな生活だ。しかし、今日は、これからの俺の生活に変化をあたえる人物と会うことなど、

この時の俺には想像もできなかった。

「さてと、今日は俺が弁当つくってきたぞ」

「「やった〜！」」

俺は今、真希、シャルと一緒に食堂へと向かっている。これから夕食なのだが、今日は俺が弁当をつくった。特に理由はないのだが、なんとなく作ろうと思ったからだ。

「そのお弁当、お姉さんにも食べさせてほしいな〜」

「「「っ！？」」」

突然うしろから話しかけられ俺たちはびっくりしながらも振り向く。そこにいたのは……

どこかで見たことあるよ〜な、ないよ〜な女子が立っていた。

その女子はリボンの色からして2年生だった。

はつきり言つて、ものすごく美人で、プロモーションも抜群だった。シャルも真希も、相当な美人なのだが、それに引けをとらない、というより、それ以上だった。

あっ、思い出した。この人は確か……

「あなたは、生徒会長にして、ロシア代表の『更識 楯無』さんですよね？」

「よく知っているわね。その通りよ」

「で、その生徒会長さんが俺の弁当を食べたいと？」

「うん」

別にいいけど、なにか引つかかるな？  
まあ・・・いいか。

「シャル、真希、いいよな？」

「うんいいよ。この人なにか気が合いそうだし」

「僕もいいよ」

即答。しかも真希が気が合いそうなんて言ってたし・・・  
真希の言うことはほとんど外れたことがないから、本当に気が合い  
そうだ。

シャルも気が合いそうだな、うん。

「じゃあ、行きましようか、生徒会長さん」

「その呼び方はやめてよ、もっと親しい呼び方にして」

「じゃあ楯無さん」

「できれば『たっちゃん』に・・・」

「楯無さんで」

「しょうがないわね。じゃあ行きましようか」

そういって、楯無さんは食堂とは別の方向に歩き出した。

「えっ、どこ行くんですか?」

「生徒会室」

これが、俺たちと榎無さんとの出会いだった……

## 生徒会長登場（後書き）

作者が勝手に、

「楯無さん出したいな・・・」

と思った結果がこれです、はい。

このあと、ラウラをいつ出すのかはわかりませんが、少しあとになっちゃうと思われます。

## 設定（5月25日現在）

この作品の設定を遅くなりましたが、なんとなく書いときます。

とりあえず一夏最強です。今後、公式戦では負けられないと思われます。でも千冬姉より強いって少しやりすぎかな？

真希とシャルとは常時ラブラブで、そうでないときなどはないです、多分！

でも、この2人以外にもくつつきます。楯無さんは確実にくつつきます。

あと可能性があるのは、チエルシーさんかナターシャさんです。理由は作者が好きだからです、はい……。なんかすみません。

あと、一夏には一応師匠がいます。

いつかそのくだりが出てくると思います。でもずいぶん先かも？

空気なのは、箒、セシリア、鈴の3人です。

今後はほとんど出ないと思われます。

ちなみに、鈴とセシリアは一夏に落ちてません。

理由は、彼女がいることを知っていたから、かな？

2人からみれば一夏は、『良き友人』みたいな感覚です。

しかし、箒は心底惚れています。

だけど、一夏は箒が苦手なため、箒の扱いはすつごく悪いです。

一夏から見た他キャラと一夏との関係

真希・・・大切に大好きな最高の恋人

シャルロット・・・真希と同じ

篤・・・苦手な幼馴染

鈴・・・仲の良い幼馴染

セシリア・・・良き友人

千冬姉・・・尊敬する姉

山田先生・・・優しくて、よい副担任

楯無さん・・・少し気になる先輩（現在）

今のところ、こんな感じです。楯無さんに対する思いは少しずつか  
どうかはわからないけど、確実に変わっていくと思われれます。他は  
変わらないかな。

楯無さんもまだ一夏には落ちてませんが、いずれ落ちます。

最後に・・・・・・ラウラが出るのは少しあとになります。

落ちるかどうかはまだ決めていません。

作者は作文の才能は本当にはないです。まったくないです。

なので、少し意味が分からなくなってしまうこともあります。が、  
そこらへんはご勘弁してください。

設定（5月25日現在）（後書き）

少し作者のプロフィールを書いときます。

ペンネーム・・・interu

年齢・・・14歳（中2）

成績・・・上の下

部活・・・野球部（ポジションはキャッチャー兼ピッチャー）

出身・・・岐阜県の田舎の方

好きなもの・・・野球、IS、菓子パン

嫌いなもの・・・抹茶アイス

彼女いない歴・・・年齢と同じ

好きなISのキャラ・・・シャルロット

苦手なISのキャラ・・・篝

こんな感じですよ。

僕は田舎者なので、たまに方言を使うかも、しれませんのでご了承ください。

役員に決定！……まあいいか

現在地、生徒会室前

俺とシャルと真希は、生徒会長こと更識楯無さんに連れられて、今ここにいます。

楯無さんは生徒会室にいと落ち着くそうだ。

夕食は大方、ここで食べているらしい。

「じゃあ入るわよ？」

「あ、はい」

何故か確認をとられ俺たちは生徒会室へと足を踏み入れた。

意外とシンプルな作りになっており、普通の学園より少し質がよい、という感じがした。

そんなことを考えていると、楯無さんがこんなことを言った……

「おめでとう。これであなたたちは生徒会役員よ」

「……はい？」

えつと……どういうことだ？

俺たちは楯無さんにつれられてここに入ったただけだ。

それ以外の事などしていないぞ？

そう、今この生徒会室に入っただけ……んっ？

生徒会室？これってもしかして……

「楯無さん……」

「んっ、なにかな？」

「これ、もしかして……『生徒会室に入ったら役員だ！』ということですか？」

「よくわかったわね、その通りよ」

「いつ決めたんですか……て、どうせ今でしょうね」

「すごいわね、テレパシーでも使えるの？」

「使えるわけないでしょう……  
ここから逆らっても無駄だよな〜」。

まあいつか。生徒会っていうのも中学校でよくやったからな。

「俺はいいですけど……真希とシャルは？」

「私はいいよ。この人といると楽しいし」

「僕も同じ意見だよ」

意外と乗り気だ、この2人。

でも見る限り本当に仲良さそうだし、いい友達になってくれそうだな。

俺はにこっと、笑みをこぼした。

「じゃあ、決定ね」

「はい、これからよろしくお願いします」

「たっちゃん、よろしく」

「よろしくお願いします」

俺、真希、シャルの順であいさつをする。  
こうして俺たちは、生徒会役員になった。

「じゃあこのお祝いは明日やりましょう。」

明日なら、他の役員の子たちもいるし。だから一夏君、ケーキ焼いてね」

「はいはい、わかりましたよ」

このあと弁当を食べて、楯無さんに褒められたりしたんだけど・・・  
・・・  
なぜだろう？そのとき俺はドキドキしてしまった・・・

(織斑一夏……すてきな男性だったわね)

第一印象から悪くなかった。見るからに誠実そうで、そしてまっすぐとした瞳。

しかし、一番すてきだったのはあの笑顔だ。

あの笑顔を思い浮かべると、自然と胸がドキドキする。

私ははじめて抱いた感情に戸惑ったが、すぐに理解した……これが『恋』というものだ……

役員に決定！・・・・・・・・まあいいか（後書き）

はい、というわけで楯無さんが落ちました。

なんか展開が急すぎたかも・・・・・・・・

反省しよう

## 本当の気持ち

俺たちが生徒会役員になった翌日の放課後

今日は生徒会室で俺たちを祝ってくれるそうさ。

そのため、俺たちは生徒会室に向かっている。

途中、筭に呼び止められたが、てきとうにごまかしておいた。正直、祝ってもらうのは嬉しい。

しかし、俺の手にはケーキがある。なぜかって？

楯無さんに頼まれたからだ。

これから祝う人に、ケーキを作らせるってどうよ？

まあ、そういつてもケーキを作るのは嫌いじゃない。

むしろ好きだ。

味の方は・・・大丈夫だろう。

俺は一応、スイーツの部門でも世界でトップだ。

これで、味にダメ出しされたら、正直へこむと思う。

てなことを考えていたら、真希がこんなことを言った。

「一夏はさ、たっちゃんと付き合いたいと思わない？」

「・・・はい？」

なんてこと言い出すんだ、この娘は！？

「な、なにいつてるんだよ？」

「だってさ、あの人すごいいい人だし、なんかシャルロットみたい  
に気が合うし、

それに・・・運命的なものを感じるんだよね。

それで、一夏はどうなの？付き合いたいの？」

楯無さん・・・正直言つて、かなり好みの人だ。もちろん、外見の美しさもだが、なにより、あの強い意志をもつていそうな瞳が好きだ。

しかし、付き合う、ということになると話が別だ。

俺にはシャルと真希がいる。

ただでさえ、2人の彼女をもっているのに、これ以上増えたら、俺自身がくるってしまいそうだ。

それに、シャルと真希にも申し訳ない気がする。

しかし、これらの事がなかったら俺は付き合いたいと思つてしまつ。楯無さんにはそれほど魅了されている。

真希の質問に俺は正直に答える。

「うーん、付き合いたくはない、という嘘にはなるが、俺にはシャルも真希もいるし、なんか2人に申し訳ない気がして、でも……………」

俺はこんなことを言つてしまった。

「2人がいいというならば、俺は・・・真剣に楯無さんを愛する」

なぜ俺はこんなことを言つたのだろうか？

こんなことを言おうとは自分では思つてもいなかった。自然と口から出てきたのだ。

なんで、なんでこんなことを……………

ああ、わかった。俺は心の片隅でこう思っているに違いない。

(楯無さんのことが好きだ)と……………

そして俺の答えを聞いた真希とシャルは……

「それって……本当？」

「嘘ついてない？」

「お、おう………」

この次2人は叫んだ

「「やったー！ー！ー！！」」

「え……な、なんで喜んでんだ？」

俺はこの反応は意外だった。

なにせ俺は、恋人たちの前であんなことを言ったのだ。

怒られてもおかしくないと思った。

しかし、返ってきたのは歓喜の声だった。

「だってさ、私たちもたっちゃんと付き合っただけよ。ほしかったんだよ。」

「そんなことで、一夏が楯無さんと付き合っただけなら、僕は許可するよ。」

一夏が楯無さんと付き合っただけ」

「え、えっと……2人とも本当にいいの？」

「「うんっ！」」

なんやかんやで、俺は楯無さんを愛することが許された？

でも、楯無さんって簡単になびかなそうだな。

簡単にはいかないかも……。でも、こうなったらとんとんやっ  
やる！

絶対に楯無さんを振り向かせてみせる！

なんて決意した俺であつた。

「じゃあ早くたっちゃんに会いにいこ」

真希とシャルにせかされて、俺は足早に生徒会室に向かった。

## 本当の気持ち（後書き）

とりあえず・・・すみません。

前日もそうだったんですけど、なんか強引でしたね。

気を付けるつもりがよけいに悪化したような・・・

そしてこのごろ、パソコンがうちの

バカ兄貴に占領されていて僕がかまえません。

今日はやっとで解放されました。

なんとかかないかな

## 真っ赤な顔（前書き）

サブタイトルが思いつかなくて、思いついたのが  
意味も分からないへんてこなタイトルに……

## 真っ赤な顔

現在地、生徒会室前

真希とシャルにせかされたため、結構早く到着した。

そして、ドアを開けようとしたそのとき……………

「私、どうしたんだろうね？」

生徒会室の中から、楯無さんの声が聞こえてきた。

しかしその声は昨日聞いたような声ではなく、

なにか悩んでいるような声だったため、俺はドアを開けるのをため  
つらった。

しかし何を悩んでいるのだろうか？

あの人が悩むなんてあまり想像できないな……………

悩んでるんだったら相談にのってあげたいけど。

しかし、この次聞こえてきた言葉は、耳を疑ってしまうようなもの  
だった。

「お嬢様は織斑一夏君のことを思うと胸がドキドキするのですね？」

「う、うん……………」

「それはね、おりむーのことが好きだからなんだよ」

「やっぱりそうなのかしら……………」

・・・はい？  
楯無さんが俺の事が好き？

ボンッ

俺の顔が真っ赤に染まった。

・  
まだあまり状況を理解していない俺にシャルと真希は小声で・・・

「一夏・・・やったね」「

なんかすっげー笑顔でこんなことを言われた。

くそっ、恥ずかしいのにめっちゃくちゃ可愛いじゃねーか！  
て、そんなことじゃなくて！

俺は今からどんな顔して楯無さんと会えばいいんだよ！？  
なんか緊張してきちまったじゃねーか・・・

「一夏、ほら早く」

「う、うん・・・」

シャルにせかされて、俺はドアを開けた。

「お、お邪魔します・・・」

「えっ・・・い、一夏君!？」

なんかすげー顔を赤くした楯無さんがいた。  
そんな顔をしている楯無さんもまたかわい・・・って！  
なに考えてるんだ俺は！？

「え、えーと・・・今の話聞いてた？」

「い、いえ、聞いてないです・・・」

「そう・・・よかった」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺の嫌いな沈黙だ。

ちらつと真希とシャルのほうを見ると・・・・・・・・  
すっげーにやけてる。

他の生徒会役員らしき人も1人はにやけていて、もう1人は微笑んで  
いる。

俺の顔がまた赤くなった。

「じゃ、じゃあとりあえず紹介しておくね・・・」

そういつて、他の役員の人たちの紹介をしてくれるのだが、  
その顔は真っ赤に染まっている。

「えーと、こっちのしっかりしてるのが・・・」

「布仏 虚よ。これからよろしくね」

「それで「うちのしっかりしてないのが……」

「布仏 本音だよ。よろしく」

「織斑 一夏です。よろしくお願いします」

「星野 真希です。よろしくねー」

「シャルロット・デュノアです。よろしくお願いします」

とりあえずこちらも自己紹介をした。

「じゃあ早速始めましょう。本音ちゃん、ジュースとってきて」

「はい」

お互いに顔の赤みがひいたところで、お祝いが始まったのであった。

恋人よ、その笑顔は反則だ………（前書き）

今回は手抜きかな？

恋人よ、その笑顔は反則だ……………

「あ、そういえば……………」

俺はお祝いが始まると同時に、あることを思い出した。

「頼まれたケーキ、焼いてきましたよ」

「あら、ありがとう」

そういつて俺はケーキをみんなに披露した。

ケーキはチョコレートケーキなのだが、使用したチョコレートは、かなりの高級品だ。

なのでこのケーキは、普通の1.5倍くらいのお金がかかる。

しかし、味はとても良いので今回はこれを作った。

お金の方は、テレシアで働いていたときに、かなり稼いだので問題ない。

初めて月収をもらった時は貯金通帳みて目を疑った。

なんかいやらしい方向に話が進んできたので少し話を戻そう。

「じゃあ本音ちゃん、お皿持ってきて」

「はい」

またも怪しい足取りで、本音がお皿を持ってきた。

あんなんでよく落とさないな、と思った俺であった。

そして、全員にケーキがまわったところで、ケーキを食べ始めた。

「これ……本当においしいわね」

「本当ですね、こんなおいしいものは初めて食べました」

「おりむーすごいね〜」

楯無さん、虚さん、本音の順で感嘆の声を漏らした。

「一夏はやっぱりすごいねー」

「こんどはタルトでも作ってね」

「はいはい」

今度は真希から褒めてもらって、シャルからお願いされた。タルトくらいならいつでもつくれるから今度みんなにもつくってやるう……

ケーキを食べ終わった後は、少し自分のことについて話した。テレシアで働いていたことや、なんで俺と真希とシャルがこんなにも仲がいいのかということなど……

そしてその次は他愛もないおしゃべりをした。しかしそれはとても楽しいものだった。

そのおしゃべりのなかで、本音の愛称が『のほんさん』になったのは  
少し別の話……でもないけど。  
まあこれからは気軽に話してくれとお願いされたので、そうすると  
しよう。

お祝いも終盤になったころ、真希がこんな提案をした。

「一夏、今度たっちゃんをテレシアにつれて行ってあげたら？」

「……え？」

見事に楯無さんと声がそろった。

ていうかそんなにやけ顔で言われても！

「だってたっちゃんも一回は行ってみたいでしょ？」

「え、ええ……まあ」

「だから、2人きりで行ってらっしゃい、これは恋人からのお願い  
ね」

2人きりって……ていうかその笑顔は反則だ！

俺が絶対逆らえないだろーが！

ほら、楯無さんも顔が真っ赤になってるし……

もういいや！やけどやけ！

「わかったよ……じゃあ今度の日曜日の夜でいいですか？」

「う、うん……」

ちらつと真希とシャルをみるとガッツポーズしている。

虚さんはすっごい笑顔で、のほんさんはすっごいにやけてる……

そんなこんなで、日曜日、楯無さんとテレシアで食事をする事になった。

恋人よ、その笑顔は反則だ………（後書き）

のほほんさんが難しい………

確認は結構必要だ（前書き）

サブタイトルが思い浮かばない・・・。

## 確認は結構必要だ

楯無さんと約束した日曜日

一緒に食事をするという約束は夜なので、午前中は久しぶりにテレシアで働くことにした。

もちろん楯無さんにはこのことは伝えてあるので問題ない。というわけで行ってきます……。

「「「「「よくぞお越しくございました、織斑様」「」「」

テレシアに到着したと同時に、たくさんのお迎えが俺に頭を下げてきた。

。 毎度毎度思っけど、これって結構恥ずかしいんだよね……。

ほら、他のお客さんもこっちを見てるじゃないか。

「えっと……とりあえずオーナーはどこですか？  
あいさつしておきたいんですけど……」

「私はここにいますよ、一夏君」

そういつて現れたのは、どこからどうみてもダンディーな、  
50歳くらいの白髪の男性。

そう、この人がこのオーナーである。

「久しぶりです、オーナー。」

「このごろIS関係とかで忙しかったのでなかなか来れずすみま  
せん」

「いえいえ、今日来てもらったのでこっちはうれしいですよ。」

「一夏君が来ると聞いて、今日はお客様がいつもより多いですし」

「ははは、でも今日は夜の8時まででいいですか？

少し女性と約束をしているもので……」

「いいですよ、一夏君の頼みならなんでも聞きますから。」

「それと……女性というのは彼女さんですか？」

ボンツ

俺の顔が真っ赤になった。

オーナーはなんてことを言うんだ！

「い、いえ……ま、まだそういう関係では……」

「まだ、ですか……」

オーナー！これ以上はやめて！

「で、では仕事場に行きますんで……」

そういうと、俺は逃げるようにその場から去って行った。

そのあと、オーナーがすごいにやけていたことは俺は知らない。

仕事場に向かうまでにサインを書いたり、握手をしたり、さらには求婚されたりして（もちろん断ったが……）なんとか仕事場についた。

そして俺は早速仕事に取り掛かる。

今日は俺がいるという事で、お客様が多くて大変だったが、ISのことに比べれば全然楽なので、楽しく仕事ができた。

ちなみに俺の作る料理は値段が高いらしい。

詳しいことはあまり知らないが、一品で軽く5万はするらしい。それでも注文してくれるお客様に感謝である。

そして楯無さんとの約束の時間は着々と近づいていった……………。

「お迎えに上がりました、楯無様」

そのとき楯無はおどろいていた。  
時間通り、一夏に指名されたところに行ったら、なんとリズムジンは待っていたのである。

「えっと…………テレシアの方ですか？」

多分そうなのだろうが、一応確認してみる。

「はい、私たちは織斑様の命令であなたを迎えに参りました」

見るからにしつかりしてそうな男性が説明してくれた。

しかしほとんど頭に入らなかったのは事実である。

なぜなら、これからのことで頭がいっぱいだったのである。

仕方がないというしかない。

これから意中の人と2人きりで食事なのだから……………。

「ではよいね」

男性に誘導されリムジンに乗り込む。  
そしてテレシヤへと向かうのであった。

告白・・・テレビマニア(前書き)

今回はちょっとで(？)一夏と楯無さんが……………。

## 告白・・・テレシアにて

一夏、テレシアにて

「そろそろかな」

俺は一度、テレシアの外に出て楯無さんを待っていた。もうすぐ約束の時間だ。

約束の時間が近づくにつれて妙に心臓が高鳴った。

理由は簡単だ。

俺は、楯無さんのことが好きだ。

好きな異性と2人きりで食事、ということになると、

誰だって緊張くらいはするだろう？

しかもこのあいだ、あんなことを聞いてしまったらなおさらだ。

「あつ、来た」

楯無さんをのせたリムジンがこちらへと向かったきた。

さらに心臓の鼓動が早くなる。

多分、今の俺の顔は真っ赤に染まっているだろう。

そんなこんなでリムジンがこちらへと到着した。

「一夏君・・・リムジンが来るなんて聞いてないわよ」

「すみません、少し驚かせたかったもので・・・」

一回下げた頭をあげて楯無さんを見る。

ズキユン！

俺は胸を撃ち抜かれた感じがした。

楯無さんの格好はというと、いかにも高そうな水色のドレス姿。

しかし、それが楯無さんにすごく似合っていて、

その・・・なんだ。す、すごく可愛くて、きれいで・・・。。。

ま、まあいつもの楯無さんではない感じがした。

そんな楯無さんに俺の心臓はとびでそうなくらいドキドキして、  
とにかく落ち着かなかった。

「では行きましょうか」

「う、うん・・・」

俺は楯無さんの手を軽く握りギクシャクしながら、  
屋上へと向かったのであった。

そのとき、お互い顔が真っ赤だったのは言うまでもない。

「着きました、ここです」

なんとか屋上のレストランにたどり着いた俺は、楯無さんをエスコートしながら席に着いた。

お互いに少しは顔の赤みが引いたが、まだ少し赤いままである。

「あっ！今日お金はどうするの？一応10万は持ってきたけど」

「ははは、大丈夫ですよ。今日は俺のおごりです」

「えっ、そんなの申し訳ないんだけど……」

「大丈夫ですって、安心してください」

「じゃ、じゃあ。お言葉に甘えて……」

おごりっ……といっても今日は働いたからお代は結構といわれた。

これはおごりっていつのかな？

まあいつか。

そして少したってから料理が運ばれてきた。

もちろん、それは豪華なわけで、素材は全て一級品である。

そして楯無さんと俺はそれを口へと運ぶ。

「お、おいしい……。流石テレシアね」

と楯無さん。しかし俺は……

「うまい、がこのステーキはすこし焼きすぎですね。  
もうすこしレアの状態だともっとおいしいですよ。」

と、流石ともいえる感想だった。

それから少しお話をしながら食事をした。

そしてだんだんと時間は過ぎていった………。

「おいしかったわ、今日はありがとう」

「いえいえ、こちらこそ」

今は食事を済ませ、屋上で夜景をみている。

これもまた絶景なわけで、俺は少し感動していた。

ちなみに、屋上には俺たち以外誰もおらず、まさに2人だけの空間。

そんなシチュエーションに自然と鼓動が早くなる。

俺はあることを決めていた。

しかし実行するのには時間がかかる。

理由は簡単。気持ちの準備ができないからだ。

「……………」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

お互いに無言。ずっと夜景を見ていた。

しかしそれは不思議と心地よく、気まづくもなかった。  
そして、こう思った・・・・・・・・。。。

今なら言える、と。

「あの楯無さん・・・・・・・・」

「な、なにかしら？」

俺は楯無さんの肩をとり真剣な表情で楯無さんを見つめる。

「っ！！」

いきなりの行動に楯無さんは驚く。  
しかし俺は話し出す。

「楯無さん、俺はその瞳に、笑顔に、そして・・・あなたに惚れま

した。

俺は楯無さんが・・・好きです。

もしよかったらずっと俺の隣にいてくれませんか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ？」

俺はプロポーズのような告白をした。

このことはテレシアに行くことになったから決めていたことだ。

実際、言うのには時間がかかったが、今は自然と言葉がでてきた。楯無さんは少し驚いたような表情をしている。

「でも・・・一夏君には真希ちゃんたちが・・・・・・・・」

「真希もシャルも賛成してくれました」

「え・・・・・・・・でも」

「もう一度言います。好きです、楯無さん」

「・・・・・・・・わ、わたしも一夏君の事が・・・・・・・・」

少しむずむずして言いにくそうだが、

俺は黙って答えを聞く。

「一夏君のことが・・・・・・・・す、す、好き！」

「楯無さん・・・・・・・・」

「一夏君・・・・・・・・」

チュッ

俺と楯無さんはそのまま抱き合っつてキスをした。  
それはとても甘いキスの味だった。

「じゃあ、これからよろしく願いします、楯無さん」

「ええ、こちらこそ。よろしくね、一夏君」

こうして俺は楯無さんと付き合っつことになった。

「この部屋に1人楯無がいる」なんてだ!?

テレシアから帰ってきた俺は寮の自室に戻った。

そこには、もちろんシャルと真希がいるわけで……、  
ここまではいい。しかし1つ、不可解な点がある。

「なんで楯無さんがいるんですか?」

「来ちゃった」

いやいや来ちゃった、じゃなくて!

なんでさっきまで一緒だった楯無さんがここにいるんだ!?

「一夏、たつちゃんから話は聞いたよ」

「2人は……」

「付き合ってるんだよね」

いやそんな笑顔で言われても……。

すぐく、すぐく可愛いのだが……くそっ!  
なんか悔しいぞ!

「だ〜か〜ら〜、もう恋人同士なんだし、私も同じ部屋でもいいよ  
ね?」

すっげー笑顔で楯無さんに頼まれた。

だからっ!その笑顔は反則だっ!

「ま、まあいいですけど……」

ほら断れない……。

どうも、恋人の笑顔というものには一生かかっても敵わないと悟った。

「あ、でも千冬姉には言っただんですか？」

そう、この1年生寮の寮長は千冬姉だ。

勝手に部屋を変った、なんてことになったら、だれであろうと鉄拳制裁がくだされる。

「あ、大丈夫だよ。織斑先生に一夏君と付き合ってる、って言った  
ら、」

ちよつと呆れていたけどなんとか了承してくれたよ」

「……千冬姉に言っただんですか？」

「うん」

なんて行動力のある人なのだろうか……。  
俺はついさっき楯無さんと別れたんだぞ。

てか、次会うときどんな顔して千冬姉に会えばいいんだよ！？  
くそっ、急に恥ずかしくなってきたぞ！

「ほら一夏、せっかく楯無さんと一緒にいられるんだから、  
もう少し喜ぼう、ね！」

「そうだな、シャルの言うとおり恋人みんなと一緒にいられるんだ

し、

「こっちは素直に言ぼう。じゃあ楯無さん、これからよろしくお願  
い  
します」

「こちらこそよろしく。」

それと、もう敬語なんか使わないでね。

あと、『さん』なんていわないこと、わかった？

「はいはい、わかったよ、楯無」

「それでいいのよ」

年上の人を呼び捨てなんて抵抗があるが、  
本人がそう呼んでほしいのならそうするでしょう。

ちらっと時計に目をやると、もう11時半を回っていた。

「もう時間が時間だし寝るぞ」

「」「」「はい」「」「」

見事にそろった3人の返事も返ってきたことだし、寝るとしよう。  
ん、ちょっとまでよ……。。。

「あのさ、みんな……」

「」「」「なに？」「」「」

「今日はみんな俺のベッドで寝るの？」

「「「もちろんっ」「」」

もちろん、って……………。

俺も健全な15歳だし、こんな美少女3人と一緒に寝るとなると、いろいろといけないと思うのだが……………。

「ダメ……………?」

おい、その上目遣いは反則だ……………。

この目に逆らえない者などこの世には存在しないと改めて思った。

「ま、まあ、別にいいけど……………」

「やったっ」

可愛いんだけどなんか悔しい。

そんなことを考えていると、楯無がすごい行動をとった。

「じゃあ……………ぬぎぬぎ」

「どわ……………!!な、なに服を脱いでんだ!?!」

そう、いきなり服を脱ぎだしたのだ。

俺は反射的に目を閉じる。

「え、ダメ?」

「ダメに決まってるでしょ!」

「え〜・・・」

「え〜、じゃない!」

「わかったわよ、一夏のエッチ」

「なんでだ!？」

そんなこんなで、楯無に振り回される俺であった。

## 一夏の朝（前書き）

遅くなりました。  
しかし、結構短めです。

## 一夏の朝

「……………朝か」

俺は目を覚ました。時計を見るとまだ5時を回ったところである。昨日はいろいろとあったけど俺はいつも通りだ。

俺はちらつと自分の寝ていたベッドを見る。

そこにはかわいらしい寝息をたてながら気持ちよさそうに寝ている美少女が3人いた。

「そういえば、俺ってこの3人と一緒に寝たんだったな」

3人とはもちろん恋人であるシャル・真希・楯無の事だ。今でこそこのように冷静を保っているが、昨日はいろいろ大変だった。

まず単純に恥ずかしかったし、1つのベッドに4人で寝るため、当然、体は密着する。

そうなるとう3人の柔らかい双丘が俺の体にぴったりとくっつくわけ……………。

俺も健全な15歳故、そんなことをされると落ち着けるわけがない。

3人はすぐに寝てしまったが、俺は寝るのに小一時間はかかった。

「はあー、なんかいつもより眠い」

少しため息をつきながらも、俺はいつも通り筋トレを始める。

メニューは単純なもので、

腹筋・・・500回

腕立て伏せ・・・300回

ランニング・・・15キロ

といったもので、1時間もあれば余裕に終わる。

この筋トレのおかげかだいぶ筋肉はついている。

最初は興味本位で始めたが、今ではすっかり習慣になってしまったが、

やっていて後悔したことは一度もなかった。

そんなこんなで筋トレを始めるのであった。

45分後、筋トレを終え、とりあえずシャワーを浴びる。

このシャワーがまた気持ち良くて、俺が筋トレをする理由の1つであつたりする。

シャワーを浴び終えたら、とりあえず3人が寝ているベッドではなく、

空いているベッドに寝転がる。

ちなみに3人はまだぐっすり夢の中にいる。

三者三様に幸せそうな顔をしている。

そんな顔を見るとやっぱりこちらとしてもいい気持ちだ。

俺はベッドに寝転びながらとりあえず、ボくっとしてみる。

実はこれも俺の好きなことの1つである。

そうして俺は、しばらくこの状態でいるのだった。

## 一夏の朝（後書き）

更新遅れました。

。なんか宿題がたくさんあって、パソコンがまえなかった……。

それともうすぐ期末テストなので少し更新できない日が続くと思います。

一夏の災難(?) (前書き)

本当に遅くなりました。

## 一夏の災難(?)

しばらくボーっとしていたらシャルが目を覚ました。

現在の時刻は6時くらいだ。

シャルは比較的早起きである。

ちなみに真希はいつつも俺が起こしている。

「おはよう、シャル」

「ふあゝ．．．おはよう一夏」

まだ眠そうなシャルであったが、その顔はなんともかわいらしかった。

本当にシャルってこういう顔似合うよな。

そんなシャルに少し見とれていると、楯無が目を覚ました、と思ったら．．．．．

「ワタシハイチカニキスサレナイトオキレマセン」

「．．．．．」

どこの童話ですかこれは．．．．．。

てか絶対俺のことからかっているだろうな、この人。

まあキスするのにはなんの抵抗もないのだが．．．。

矛盾するかもしれないけど、正直めちゃくちゃ恥ずかしいのですよ。だって楯無ってすごい美人だし、俺も健全な15歳だし．．．。

しかも楯無の今の格好はというと……下着である。  
黒くて大人っぽいかにも千冬姉がつけてそ……げふっげ  
ふっ。

と、とにかくなんか色っぽい下着だ。

そして当たり前のごとく、楯無を直視できるわけもなく、とにかく  
ドキドキする。

それにキスって……。

キスってというのはもっと、なんかちゃんとしたやつ……、

「ハヤクシナイトオソツチャウゾ」

仕方ない……キスするほかはないようだ……。  
まだドキドキしている心臓を少し沈めて俺は意を決する。

チュッ

よ、よしっ。キスはしたぞ！

「おはよう、一夏」

ものすごくかわいらしい笑顔の楯無。  
どうやらご満悦のようだ。

しかし、これは火種にすぎなかった。

「あ〜っ！ たっちゃんずるい！」

「僕にも僕にも！」

いつの間にか起きていた……ていうか多分シャル起こされて



## 一夏の災難(?) (後書き)

やっとで更新できました。

テストめんどくさかったです。

でもこれから中体連があるんですよ。

うちの野球部は人数がなんと7人!

助っ人を他の部活から借りてなんとか出れます!

まあ勝てる確率は0に近いですが……。

でもがんばりたいです。先輩のためにも!

**暴力「Not」解決！（前書き）**

久しぶりにあの人が出ます。

まあ、扱いはひどいですケド（笑）

## 暴力「Not」解決！

俺はやつとで解放され、朝食をとり食堂へと行くこととしている。もちろん、3人も一緒だ。

まあ、いまからドアを開けると他の生徒に出会う確率はかなり高い。そうになると当然、俺の部屋から出てきた楯無を不思議がるはずだ。そして、たくさんの生徒に囲まれ質問攻めにあい、最終的には千冬姉がやってきてすぐに沈静化・・・みたいな感じになる。

かといって、他の生徒との接触を避けることなど無理に等しい。どうやら覚悟を決めなければいけないようだ。

・・・・・・誰か忘れてるような気がするのはなぜだ？

まあいつか。俺はドアを開ける、が・・・。  
この『誰か』を思い出していればよかった、と思ったときには手遅れだった。

「あ、箒・・・」

「一夏か。おはよ・・・。誰だ、その後ろの人は？」

箒は俺の後ろ・・・楯無のほうを見て不機嫌そうな顔で言った。そう、俺の忘れていた『誰か』とは箒の事だ。  
またこの前みたいにならなければいいが・・・。

ていうか、箒って俺の事諦めたんじゃないのか？

そうだったら別にいい……わけないか。

「あなたが篝ちゃんね。初めまして、私は生徒会長の更識楯無よ」  
篝の質問に楯無が答えた。

「いえ、そういうことではなくて、その……なんで一夏の部屋に？」

「恋人だもん、私だけ違う部屋っていうのもあれでしょ？  
まあ、恋人になったのは昨日だけだね」

ピキッ

あ、篝がなんかやばい。絶対怒ってるなあれ……。  
ていうか、まだ俺の事諦めてなかったのかよ……。  
あいつも結構執念あるな。

て、感心してる場合か！？このパターンって絶対木刀が日本刀で襲ってくるやつだろ！

やばいな、これ……。

いや、別に襲ってくるのがやばいんじゃない。

それ以外の事がいろいろとやばいのだ……。

「死ねええええ！いちかあああああああ！！！！」

ほらやっぱり日本刀で襲ってきたやつだ。

なんでいつも木刀か日本刀をもっているんだこいつは……。

千冬姉に見つかったらまずいな、これ。

考え事をしていても刃はどんどん迫ってくる。

俺はとりあえずそれをかわし、箒の日本刀を持っている方の手を少し強めにたたく。

すると、箒は少しひるみ、日本刀が手からこぼれ落ちた。

その日本刀を俺は奪い取り、とりあえずへし折る。

日本刀なんて危ないからな。

そして、まだ少しひるんでいる箒に話しかける。

「箒……お前の気持ちはよくわかる。だけど、暴力はやめろって言わなかったか？」

確かに、自分を振った相手が、また新しい恋人をつくったとなるとそいつにイライラするのは当たり前だ。しかも3人目、俺は男として結構最悪な方の部類だよ。だけど、暴力だけはやめろ。暴力で解決できる問題などは存在しない。暴力は人を傷つける。今回は相手が俺だったからまだ少しはよかったけど、他の人に日本刀で襲いかかってみる。その人は命までもが危ないじゃないか。ただ、自分の感情にまかせて暴力をふるうな！」

最後は説教のように箒に言った。

俺はこんな暴力が大嫌いだ。暴力からはなにも生まれない。

それは俺がこの世で最も尊敬する師匠の教えでもある。

たしかに俺は最低な男だ。

だけど、いくら最低な人間にも、理不尽に暴力はふるってはいけない。

箒にはこれを理解させる必要がある。体の奥底まで、深く、深く……。

「そ、そんなことぐらいわかっている！」

「わかってないから言ってんだ！」

「ぐっ……ああああああああ！……！」

叫びながら箸はどこかへ行ってしまった。

「一夏……箸、ちゃんと理解したと思っ？」

シャルが聞いてくる。

「それはわからない……けど！」

俺は笑顔でこういった。

「お前たちの事は、なにがあっても俺が守るからな」

「……うん！」「」「」

そうして俺たちは食堂へと向かった。

そして食堂で質問攻めにあっただのは言っまでもない。

**暴力≠Not解決！（後書き）**

久しぶりに箒を出しました。

だけどやっぱり扱い悪かったですよね。

まあうちの箒はそういうキャラですし……いつか

転校生VS織斑一夏(口喧嘩)(前書き)

ラウラが出てきますが、いきなり喧嘩です。

転校生vs織斑一夏(口喧嘩)

朝食を食べ終えたら、楯無と別れ、教室に向かった。

朝食のとき、みんなに俺が楯無と付き合っていることを、シャルと真希、そして楯無自らが説明したため、みんなそのことを知っている。

しかしみんなすぐに納得してくれた。  
のほほんさんいわく、

「今更おりむーがなにをしたってみんな驚かないんだよー」

らしい………。

まあなんにせよ、みんな納得してくれたしよかった……じゃないな。

今回は算にかなりひどいことしたし……さすがに今度謝らないと。

「今日は転校生を紹介します」

SHRで、いつものように元気よくいう山田先生。  
ていうか転校生か……。

まあ、すぐに仲良くなれるだろう。

そう思えたのはこの時だけだった……。

教室に入ってきた転校生。

きれいな銀髪、しかし左目には黒い眼帯をしている。

体格は小柄で細身だが、軍人のような気配を放っている。

「……………」

みんなの前にきても沈黙の転校生。

おいおい、大丈夫か？

だけど緊張しているようには見えないけど……。

「あいさつをしろ」

「はい、教官」

千冬姉の言葉にやたらと反応する転校生。

それより……教官？

なんでこいつ、千冬姉のことを教官って呼んでいるんだ？

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「え、そ、それだけですか？」

簡単すぎる紹介の後ラウラとかいう転校生は俺の方に向かってきた。

ヒュッ

するといきなり平手打ちをしてきやがった。

俺はそれを小指一本で止める。

「ずいぶんcrazyなあいさつだな、ボーデヴィツヒ」

「ふんっ」

ボーデヴィツヒは手を引つ込める。

そして、こんなことを言いやがった。

「私は認めない。お前があの人弟など、認めるものか！」

「なんでお前にそんなこと言われなくちゃならない。

どこのだれが俺を千冬姉の弟だと認めようが認めまいが俺は正真  
正銘千冬姉の弟だ。

お前にそんなこと言われる筋合いはねーんだよ」

「お前はあの人顔に泥を塗った。」

お前は教官の汚点でしかない。汚点でしかない貴様が、教官の弟だと？

笑わせるな！お前はただの汚点だ！」

「ああ、確かに俺は千冬姉の顔に泥を塗った最悪な弟だ。

しかし、ただの汚点だと？ふざけるな！！！

俺はろくでもない弟だよ。だけど弟であることに変わりわない。

そしてただの汚点でもない。俺は……織斑一夏だ！

汚点でもなんでもねえ。織斑千冬の弟、織斑一夏だ！

お前みたいなやつが俺たち家族の関係をほいほいと崩すんじゃない  
え！」

「織斑、そこまでにしておけ。ボーデヴィツヒもだ」

「……くそっ」

「わかりました、教官」

少し怒鳴りすぎてしまったためか、千冬姉に止められた。  
しかしまだ苛立ちは抑えきれない。

顔にでてしまっているのだろう。みんな怯えている

「織斑先生、少し席を外していいですか？」

「……特別に許可する」

「ありがとうございます」

このままじゃだめだと思い、俺は屋上へと向かった。

## 一夏 屋上にて

俺は教室を抜け出し、屋上へとやってきた。

とにかく今は1人になりたくてしかたがなかったからだ。

あのラウラとかいう転校生が言っていたことはあの日の事だ。

そうに違いない。

俺がおかした最大の失態。それは……………、

俺の誘拐事件だ

第2回モンド・グロツソ。

ISにおいて圧倒的な実力をもっていた千冬姉は優勝確定とまで言われていた。

そして決勝戦の日。

俺は……………誘拐された。

普段の俺ならそんなことは誘拐犯を殴って、逆に捕まえることができただろう。

しかしその日はかなり油断していた。

とにかく千冬姉の事だけを見てたから……………。

そしてわけもわからないところに監禁された。

脱出しようにも、全身が鉄の鎖で縛られていて、

衰弱していた俺はほとんど身動きがとれなかった。

正直怖かった。

もう誰にも会えないのだろうか？

このまま僕は死んでいくのだろうか？

そんなことしか考えなかった。

しかし、光のない部屋に突然光が射した。

最初は状況が理解できなかつたけど、

入ってきた人の顔が見えると、僕は安心感に支配された。

千冬姉が助けに来てくれたのだ。

自身のIS、暮桜を纏い、試合をボイコットして……………。

優勝確定とまで言われていた織斑千冬が決勝戦をボイコットした。

この事実が瞬く間に世界中に広まった。

こうして、僕は千冬姉の顔に泥を塗ってしまった……………。

あのラウラとかいうやつは、千冬姉がドイツにいたところの教え子だろう。

それで、自分を鍛えてくれた偉大すぎる人に泥を塗った人などその人の弟にふさわしくないってことか……。

まあ確かにふさわしくないのかもしれないけど、

天地がひっくり返っても俺は千冬姉の弟であることには変わらないけど……。

あれ、なんでだろう？

そんなことわかってるのに……なんでこんなにもイライラするんだ？

あー……なんか本当にやばいな、これ……。

下手するとあのころの俺に戻っちまう。

俺が最悪だったあのころに……。

あのととき救ってもらったのが師匠だったな……。

あれ、なんかいきなり師匠に会いたくなってきた。

俺はまた師匠に助けてもらおうとしているのか？

2度も同じ失態はしないっていったのに……。

でも、師匠以外にこの気持ちから救ってくれる人はいるのか。

篤、鈴、セシリア、クラスメートのみんな……。

そして恋人のシャル、真希、楯無……。

ダメだ。

なぜか、師匠のようにはいかない気がする。

ならば自分自身？

絶対無理だ。よけいに悪くなる。

やっぱり師匠しかいないのか……。

でもこれ以上師匠に頼りたくない。

けどほっておいたら、みんなにも迷惑がかかる。

……しかたがない、か。

俺は明日、師匠のところに行く決心した。

一夏の憂鬱（前書き）

大変遅くなりました。

## 一夏の憂鬱

ラウラが編入してきた日の翌日。

1年1組はざわついていた。

そしてほとんどの者がある席を見ていた。

そこに座っているはずの、織斑一夏がいない席を……。

ラウラ以外の生徒は不思議がったり、心配した表情を浮かべている。

この場で、一夏が休んだ理由を知っている、

シャル、真希、千冬の3人は複雑な表情をしていた。

「あー、織斑君はどうしたんですか？」

SHRのとき、誰もが気になっていたことを真っ先に山田先生が、千冬に尋ねた。

山田先生も一夏の事が気になっていたのである。

当然と言ったら当然だ。

自分のクラスの生徒がこの場にいないのは誰だって気になる。

しかも、今回は一夏だ。

一夏は学園唯一の男子で、世界的に見ても貴重な存在である。それが休んだとなると気にしてられずにはいられない。

ちなみに、質問を受けた千冬は生徒達からの視線の集中豪雨を受けている。

「あいつはみでの通り休みだ」

そんな中千冬は淡々と答える。

「えっと……、風邪ですか？」

山田先生が尋ねる。

「いや、ちがう。あいつは今日ある所へ出掛けている。特別にな」

「あの、あるところって……」

「それは……」

千冬は少しためらってから「はー……」とため息をした後、

「……あいつの師匠の所だ」

「はー……、やっぱり気が乗らないな……」

俺は今、IS学園に、というより千冬姉に特別に許可をもらって、外出している。

師匠の所へ行くためなのだが……。

本当に気が乗らない。

なぜなら、同じことで師匠に助けを求めてしまっているということが、

どうにも快く思えないからだ。

あの人なら大歓迎で悩みを聞くだろうし、解決もしそうだけど、

こちらとしてはあまり頼りたくない。

いや、頼っちゃだめだと思う。

だけど、どうにも心の中のモヤモヤした気持ちや苛立ちは消えてくれない。

今ラウラが視界に入ったら、自分に対しての苛立ち、ラウラに対しての苛立ちが、溢れ出して、暴れだしてしまうかもしれない。そうになると、必然的に周りに迷惑がかかる。

俺は誰かに頼ることは好きじゃないけど、周りに迷惑をかけることの方が嫌いだ。

まわりに迷惑をかけないために、この状態のままはいけないと思う。

だから俺は師匠に頼るしかない。

それしか、俺の頭のなかで選択肢はでてこなかった。

俺はしかたなく、師匠のところへと向かい続けた。

## 一夏の憂鬱（後書き）

今回は前書きにも書いた通り更新がかなり遅れました。  
すみません。

1回書いた文章が消えてしまうというハプニングが3回ほど起きて、  
作者がやる気を失ったことが原因です。

師匠（前書き）

更新がかなり遅れました。すみません。

## 師匠

今、俺こと織斑一夏は町はずれの山に来ている。

それは自然と気持ちが安らぐような、ほっとするような場所だ。

まわりには森林が生い茂り、川の音と小鳥のさえずりしか聞こえず、大自然というものに支配されている。

その大自然の中に、1つだけ自然のものではないものがある。

俺の目の前には寺のような建物。

それは決して大きく、立派ではないが、けっしてボロボロというわけでもない。

そして、この環境にとけこみ、自然と大自然の中に存在している。

これは俺の師匠、不知火優斗の家だ。

師匠は優斗の文字通り、果てしなく優しく、命を尊重し、自然を愛し、

人を愛し、すべてを平等に考え、悩む人を助ける、まさしく人間の鏡だ。

さらに武術にもたけていて、実力的には俺より上。努力した結果だと師匠は言っていた。

こんな師匠は誰からでも憧れを抱かれるだろう。

実際俺もその一人だった。

しかし、俺の場合最初からではなかった。

誘拐されて、千冬姉が助けしてくれた日から一週間。

俺は学校も行かずにわけもなくふらふらとほろつき歩いていた。

俺のせいで千冬姉が・・・俺が弱かったから・・・。

このことしか頭に浮かばず、自分で自分を追い込んでいた。  
そして力を求めた。

しかしその時求めた力は、誰かを救うための力ではなく、  
ただ、他の人に迷惑をかけないような力、

自分が自分であるためだけの力。

こんなくだらない力を求めていた。

その時の俺は目つきが悪かったためかよく喧嘩を売られた。

そのたびに、喧嘩を買い、相手をぶん殴った。

この時の俺にはこうすることしかできなかった。

「君、少しいいかな？」

俺がふらふらと歩いているとまだ若く、30代くらいの男が話しかけてきた。

その表情はどこか柔らかく、初対面でも安心するような笑顔だった。

これが俺と師匠の出会いだった。

## 師匠（後書き）

前書きにも書きましたが更新が結構遅れました。相変わらずレベルが低くてすみません。

これからは愚痴です。読まなくても全然いいのでスルーしてください。

このごろ悪いことが続きます。

なんか学校では問題が起きていろいろとめんどくさくて、なぜか説教させられるし、その説教した先生がいきなり自分が顧問やっている剣道部の自慢するし、僕の所属する野球部を侮辱して、さらに僕がもつとも尊敬している先生までも侮辱されました。

実際、うちの剣道部はかなり強くて、毎年当たり前のように全国行ってるけど、その顧問は大会の申し込みをするだけで、他はなんにもしてないのに、全国に行けるのは自分のおかげだとか言ってるし、それだけでも十分むかついたけど、なにより野球部をおもいきり侮辱し、尊敬する先生をも侮辱したことで僕の堪忍袋の緒が切れて、その先生に暴言を大声ではきました。

もちろん後でこっぴどく怒られたけど、まだ納得いきません。

野球部の部長（この間部長になりました）として、先輩たちがものすごい頑張って創ってきた野球部を侮辱されて怒らないわけがありません。

侮辱した先生よりも何億倍もいい、僕の尊敬する先生は、僕が野球をやっている、最も楽しい人で、僕に野球の楽しさを教えてくれました。

その先生が侮辱されて怒らないわけがありません。

たとえ嫌われようと、成績を落とされようと、僕は絶対その先生を許しません。

後書きに変な愚痴書いてすみません。

I don't get it (前書き)

すみませんっ!!

更新がかなり遅れてしまいました。

そのくせにいつもより短いです。

いつも駄文だけど今回はさらに駄文です。

いろいろと本当に申し訳ありません!

I don't get it

「…………誰？」

俺は見知らぬ男に話しかけられほんの少し驚いたが、特に気にすることなく、

冷たい声でその男に問う。

「なんと言ったらいいでしょうか…………。まあ、苦しんでいる人間を見逃せない

ただの節介焼きとを考えてください。」

「で、その節介焼きが俺になんか用なの？」

「用というか…………。ただ、あなたが苦しんでいるように見えませんでしたから。」

先ほども言いましたが僕は苦しんでいる人は見逃せません。大げさに言つとあなたを救いたいから声をかけた次第です」

「…………それだけ？」

「はい」

俺は相変わらず冷たい声で接しているが、その男は絶えず笑顔を浮かべている。

その笑顔は、油断するところからも安心してしまうような笑顔だった。

「…………よけいなお世話だ。俺の事なんてほおっておけ」

「あなたをほおっておくことなんて僕にはできません。」

あなたは確実に苦しんでいます。しかも、かなり深刻に……。そんな人間をほおっておくことなど、僕ができるはずありません。

「

「……………うるさい。どうせ、お前に俺なんかを救うことなんてできない」

「意地でも救ってみせます。大丈夫です。安心してください。」

「……………お前は俺をどのように救うんだ？」

「今はわかりません。ただ、あなたが事情を話してくれればどんなものからも、

あなたを救ってみせます」

「……………本当か？」

「はい、約束します」

「……………分かった。信じてやる」

「……………ありがとうございます。それではついてきてください」

俺はその男についていった。

分からなかった。

なんで、あつて間もない人間に俺はついていったのだろうか？

この時の俺なら、無視して、即急に立ち去っただろう。

しかし、このとき俺は無視もせず、ただその男についていった。

分からない。自分が何を考えているのか分からない。

俺はこの男を信用したのだろうか？

それとも、あの笑顔に安心してしまったのだろうか？

俺は、自分がなにを考えているのかわからないまま、その男についていき続けた。

I don't get it (後書き)

前書きにも書いた通り、更新が遅れました。

宿題とか部活とか体育祭の練習とか書いた文章が消えてしまつとかいろいろあつて少し忙しかったです。

言い訳にしかなくていませんが、申し訳ありませんでした。

これからもこのペースになると思いますがよろしくお願いします。

## 不知火優斗です

「・・・・・・・・ここは？」

俺が連れてこられたのは、町はずれの山。

その山は『大自然』という言葉があまりにも似合っていた。  
生い茂る森林、小鳥のさえずり、川で水が流れる音。

それらがこの空間を支配しており、人工的なものは全くなく、  
ただ、『大自然』だけがあった。

その『大自然』は当たり前のように、俺の心を癒し、  
俺の悪いところを全て浄化してくれたような気がした。

「ここは僕の家がある山です」

「こんなところに、か？」

「はい。少し不便でも、このような素晴らしい空間で過ごした方が、  
僕としては好きなんですよ。正直、都会というものは苦手です。

・・・

「まあ、それは俺も同感だ」

「ありがとうございます」

こんな会話をしながら、俺とその男は歩き続けた。

「着きました、ここですよ」

歩き続けて約1時間、男の家に着いた。

それは一見すると、神社のような形をした建物だったが、すごく立派というわけ

でもなく、ましてやボロボロというわけでもないものだった。

ただ、その建物はこの大自然と一体化しているような感じがしており、

自然とこの空間に存在していた。

「さあ、中に入ってください」

俺は言われるがままにそいつの家に入った。

「意外ときれいな」

中は結構きれいで、清潔感が漂っていた。ものは全て整理してあり、最低限しかそろえてない家具もきちんと揃えてあり、

この男がきれい好きということがすぐに感じられた。

「こっちの部屋です」

俺は男に案内されて、リビングと思われる部屋に入った。

そしてソファーに腰をかけ、その男と向かい合う。

「さてと、早速本題に行きましょうか」

この時、男の顔が真剣なものになった。

笑顔は相変わらず絶やしていないが、目つきが変わっていた。

そして男同様に、自分の顔も真剣になったことは自分でもよくわかった。

「あつ、まだ名前を言ってませんでしたね。」

僕は不知火優斗です。お好きにお呼びください。」

「俺は……」

少しためらった後、少し強めの声で俺は言った。

「織斑一夏だ」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0065t/>

---

氷点下の翼

2011年8月15日16時23分発行